ワキ　「風早乃。三保の浦曲を漕ぐ舟乃。浦人騒ぐ。波路かな

春の景色を待っている松原では、波が立ち続いている海面に朝霞がかかっている。空には月が消えることなく残っていて、下賤で詩歌の風流も分からない自分でさえも我を忘れてしまうような美しい景色だ。

「これハ三保の松原に。白龍と申す漁夫にて候。萬里乃好山に雲乍ちに起り。一樓の明月に雨初めて晴れり。げに長閑なる時しもや。春の景色松原の。波立ち続く朝霞。月も残り乃天の原。及びなき身の眺めにも。心そらなる景色かな

山路を踏み分けて来た清見潟で、遥かな三保の松原を眺めたその素晴らしさは忘れられない、と昔の人も歌ったほどだ。そんな美しい松原に一緒に通おうではないか。

「忘れめや山路を分けて清見潟。遥かに三保の松原に。立ち連れいざや。通はん立ち連れいざや通はん

ワキ　「風向かふ。雲乃浮波立つと見て。雲乃浮波立つと見て。釣りせ

白龍　今日は風が早くて波が高い日だな。ほら、三保の浦で船を漕いで人や帰るらん。待て暫し春ならば吹くものどけき朝風乃。松ハ常磐の

いる漁師たちが騒いでいるよ。自分は三保の松原に住んでいる白龍という漁師だ。ずっと遠くの方まで連なっている美しい山々にかっている雲が

聲ぞかし。波ハ音なき朝凪に。釣人多き。小舟かな釣人多き小舟かな

「我三保の松原に上り。浦の景色を眺むる処に。虚空に花降り音楽聞

あっという間に消え去り、雨が上がったばかりなので楼上の月は晧晧と

え。霊香四方に薫ず。これ常事と思はぬ處に。これなる松に美しき衣懸

照り輝いている、と昔の詩人が詠んだ様なとてものどかな日だ。こんな

かれり。寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて帰

り古き人にも見せ。家の寶となさばやと存じ候

シテ　「なうそ乃衣ハ此方乃にて候。何しに召され候ぞ

白龍　やあ、風が吹いて雲がまるで本物の波のように押し寄せるのを見て、漁師たちが釣りをしないで帰ろうとしている。おうい、待て待て。今は春なのだから吹く朝風はのどかなもので、松の葉の色と同じようにいつもと変わりない。

天人　もし、その衣は私のものです。何故持っておられるのですか。

ワキ　「これハ拾ひたる衣にて候程に取りて帰り候よ

白龍　これは自分が拾った衣だから、持ち帰って家宝にするのだ。

シテ　「それハ天人の羽衣とて。たやすく人間に與ふべき物にあらず。

ほら、波の音も立たない朝凪だ。釣人の乗った小船がたくさん沖に出て行っているのが見える。

もと乃如くに置き給へ

天人　それは天人の羽衣なのです。容易に人間が持つべきものではありません。元の様にお置き下さい。

舟から降りて三保の松原に上がり、浦の景色を眺めていると、不思議なことに空から花が降り、音楽が聞こえてきた。何とも言えない香りまで立ち込めている。これはただごとではないと思っていると、おお、この松に美しい衣がかかっている。近寄って見てみると色も香りも素晴らしく、普通の衣ではない。よし、持ち帰って古老にも見せて、家宝にするとしよう。

ワキ　「そもこ乃衣の御主とハ。さてハ天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留め置き。國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ

白龍　なに、この衣の持ち主ということは、君は天人なのか。それならなおのこと、こんな世の中には珍しい奇跡として、この衣は国の宝にする

べきだ。絶対に返さないよ。　なし

シテ　「悲しやな羽衣なくてハ飛行乃道も絶え。天上に帰らん事も叶　天人　このようなことになっては天人も羽を失った鳥の様なものです。

ふまじ。さりとてハ返し賜び給へ　天上に上がろうとしても衣が無くてはかないません。

天人　まあ、なんて悲しいことをおっしゃるのですか。羽衣がないと私は　ワキ　「地に又住めば下界なり

飛び行く術がなく、天上に帰ることができません。お願いですから返し　白龍　地に住めばそこは人間の世界で天人のいるべき所ではない。

て下さいませ。　シテ　「とやあらんかくやあらんと悲しめど

ワキ　「こ乃御言葉を聞くよりも。いよいよ白龍力を得。もとよりこ乃　天人　ああ、私はどうすればよいのでしょうか、と悲しむのですが、

身ハ心なき。天乃羽衣とり隠し。叶ふまじとて立ち退けば　ワキ　「白龍衣を返さねば

白龍　この言葉を聞くや否や、ますます白龍はいい気になって、元々自　白龍　白龍は衣を返さないので、

分は賤しい漁師であるし、情けをかけてやることもない、と思い羽衣を　シテ　「せん方も

隠してしまった。返すことはできない、と言って立ち退くと、　天人　もうどうしようもないのです。

シテ　「今ハさながら天人も。羽なき鳥乃如くにて。上らんとすれば衣　ワキ　「力及ばず

白龍　どうしようもない

地謡　「住み馴れし空に何時しか行く雲乃羨ましき氣色かな。

地謡　「涙の露乃玉鬘。挿頭の花もしをしをと。天人乃五衰も目の前に

「迦陵頻伽の馴れ馴れし。迦陵頻伽の馴れ馴れし。聲今更に僅かなる。

見えて浅ましや

雁がねの帰り行く。天路を聞けば懐かしや。千鳥鴎乃沖つ波。行くか

地謡　涙が止めようも無くこぼれて、髪にかざした花もしおしおとなっ

帰るか春風乃空に吹くまで懐かしや空に吹くまで懐かしや。

てきました。天人の五衰(＊)が目の当たりになり、何と浅ましいことで

地謡　住み慣れた大空にどんどん上ってゆくあの雲がうらやましい限

しょうか。

りです。

(＊) 天人が命を落とす時に現れるという五つの兆候。衣が汚れ、花の

聞き慣れた迦陵頻伽の声も今となってはほとんど聞こえてきません。千

髪飾りがしおれ、脇から汗が出、悪臭を放ち、楽しくなくなってしまう。

鳥やかもめが沖へ行ったり浜へ帰ったりする様子、春風が大空に吹く様

シテ　「天の原。ふりさけ見れば。霞立つ。雲路まどいて。行方知らず

子まで天上を懐かしくさせるのです。

も。

ワキ　「いかに申し候。御姿を見奉れば。餘りに御傷はしく候程に。衣

天人　振り仰いで天上を見ると霧が立ち込めて雲の路も分かりません。

を返し申さうずるにて候

どちらへ行けばよいのか、それすら知ることができないのです。

白龍　おい、君の姿を見ているとあまりにも痛々しいので衣を返すこと

にするよ。

ことなので、天人が天下った形見として月宮天女の舞曲をここで奏して、

シテ　「あら嬉しや此方へ賜はり候へ

世の中の憂鬱さに嘆く人々を癒すために伝えることにいたしましょう。

天人　まあ、嬉しい。でしたらこちらへお渡し下さい。

けれど衣が無いと無理ですので、まず返して下さい。

ワキ　「暫く。承り及びたる天人の舞楽。只今此処にて奏し給はば。衣を返し申すべし

ワキ　「いやこの衣を返しなば。舞曲をなさでそのままに。天にや上り給ふべき

白龍　いや少し待て。噂に聞いた天人の舞楽を今ここで披露してくれれば衣を返すよ。

白龍　いや、この衣を返せば君は舞曲を奏さないですぐに天に上がってしまうだろう。

シテ　「嬉しやさて八天上に帰らん事を得たり。こ乃喜びにとてもさらば。人間乃御遊乃形見の舞。月宮を廻らす舞曲あり。只今此処にて奏しつつ。世乃憂き人に傳ふべしさりながら。衣なくて八叶ふまじ。さりとて八先づ返し給へ

シテ　「いや疑い八人間にあり。天に偽りなきものを

天人　いいえ。疑いは人間界にのみ存在するのです。天上において偽りは絶対に有り得ないのです。

ワキ　「あら恥かしやさらばとて。羽衣を返し與ふれば

天人　嬉しい、衣があれば天上に帰ることができます。本当に喜ばしい

白龍　ああ、これは恥ずかしいことだ。すぐに衣を返すとしよう。

シテ　「少女ハ衣を著しつつ。霓裳羽衣の曲をなし　りもなければとて。久方乃。空と八名づけたり

天人　少女は衣をまとい、霓裳羽衣の曲を奏し、　地謡　東遊の駿河舞はきっとこの時から始まったのだろう。

ワキ　「天乃羽衣風に和し　さて、久方の空とは、イザナギ・イザナミの二神が世に現れ天地四方を

白龍　天の羽衣は風になびき、　定め給うた昔、空は限りなく広がっていたことから付けられた名なので

シテ　「雨に潤ふ花乃袖　す。

天人　雨に潤う花の様に美しい袖を翻し、　シテ　「然るに月宮殿の有様。玉斧乃修理とこしなえにして

ワキ　「一曲を奏で　天人　そして、その空にある月宮殿は美しい斧をもって建築されたもの

白龍　一曲を奏でて、　で、永遠に破損することはありません。

シテ　「舞ふとかや　地謡　「白衣黒衣の天人乃。数を三五に分つて。一月夜々の天少女。奉

天人　舞うのです。　仕を定め役をなす

地謡　「東遊乃駿河舞。東遊の駿河舞この時や。始めなるらん　地謡　その月宮殿内には白衣と黒衣をまとった天人がそれぞれ十五人

「それ久方乃天と云つぱ。二神出世乃古。十方世界を定めしに。空八限　ずつ住んでおり、一月の間毎夜順に奉仕し、舞の役を勤めているのです。

（月では、毎月一日から白衣の天人が一人ずつ宮殿に入り、それに伴って黒衣の天人が一人ずつ出て行く。十五日には白衣の天人のみとなり、満月になる。その後、黒衣の天人と入れ替わるにつれて月は欠けていくらしい。）

シテ　「我も数ある天少女

天人　私もこの三十人の天人の一人で

地謡　「月乃桂の身を分けて假に東乃。駿河舞。世に傳へたる曲とかや

地謡　月の世界に住まう者なのですが、今一度この東の国に降り立ち駿河舞を舞って、世の中にこの曲を伝え残すことにしましょう。

地謡　「春霞。たなびきにけり久方の。月乃桂乃花や咲く。げに花鬘色めくハ春のしるしかや。面白や天ならで。ここも妙なり天つ風。雲の通路吹き閉ぢよ。少女乃姿。暫し留まりて。こ乃松原の。春乃色を三保が崎。月清見潟富士乃雪いづれや春乃曙。類ひ波も松風も長閑なる浦乃有様。その上天地ハ。何を隔てん玉垣乃。内外の神乃御裔にて。月も曇らぬ日の本や

地謡　春霞がたなびいて、まるで月の世界に咲く美しい桂の花の様です。なるほど、この花の髪飾りがこんなにも華やぐのは春のせいでしょう。本当に面白い春の景色です。天上でなくともここ三保の松原も非常に優れた眺めです。さあ大空の風よ、天上へ行く雲の通い路を吹き閉ざして下さい。私はしばらくこの松原に留まって春景色を眺めていることにしましょう。三保が崎も清見潟も富士にかかる雪も、ここからの眺めは他所とは比べ物になりません。波音や松風までのどかな浦の景色です。それにこの天地はいずれも内外の神の末裔なので何の隔ても無く、月の光もこの日本には曇ること無く降り注ぐのです。

シテ　「君が代ハ。天の羽衣稀に来て　波に浮かび、雲を払う嵐が花を降らす。こうした景色の中で、天人が白
天人　ごくまれに天人が降りてきて、　雲の様な袖を翻し舞う姿は言いようも無く美しいものだ。
地謡　「撫づとも盡きぬ巌ぞと。聞くも妙なり東歌。聲添へて数々乃。　シテ　「南無帰命月天子。本地大勢至
笙笛琴箜篌孤雲乃外に充ち満ちて。落日乃くれないハ蘇命路乃山をう　天人　月天子の御本地大勢至菩薩に拝し奉ります。
つして。緑ハ波に浮島が。拂ふ嵐に花降りて。げに雪を廻らす白雲の袖　地謡　「東遊乃舞の曲
ぞ妙なる　地謡　それでは、東遊の舞曲を舞いましょう。
地謡　その柔らかい羽衣で堅い巌を撫で、永い永い時間をかけていつか　シテ　「或ハ。天つ御空乃緑の衣
その巌が終に擦り減らされる時が来ても、我が大君の御世が続きます　天人　あるいは大空の緑の衣と言いましょうか、
ように、と詠まれた様に、この御世が何のかげりも無く栄え給うのは本　地謡　「又ハ春立つ霞乃衣
当にめでたいことです。　地謡　もしくは立春の霞衣と言いましょうか、
そう天人が美しい東歌を歌うと、それに合わせて笙・笛・琴・箜篌など　シテ　「色香も妙なり少女乃裳裾
様々な音が空中に満ちて、夕日の紅色が須彌山を映し出し、緑の色が　天人　色も香りも美しい装いで、

地謡　「左右左。左右颯々の。花を翳し乃。天の羽袖。靡くも返すも。

衣を浦風にたなびかせた天人は、三保の松原から浮島が原へ、愛鷹山を

舞乃袖

経て富士の高嶺へと上って行き、やがて大空の霞に紛れて消え失せたの

「東遊の数々に。東遊乃数々に。その名も月乃。色人八。三五夜中の。空

だった。

に又。満願真如乃影となり。御願圓満國土成就。七寶充満乃寶を降ら

し。國土にこれを。施し給ふさる程に。時移つて。天の羽衣。浦風にたな

この能楽「羽衣」の原文＆現代語訳は、

びきたなびく。三保乃松原浮島が雲の。愛鷹山や富士の高嶺。かすか

左記のＨＰより引用させて頂きました。

になりて。天つ御空の。霞に紛れて。失せにけり

http://csspcat8.ses.usp.ac.jp/users/nougakubu/tan5-zenbun.htm

地謡　花をかざした天人がさらさらと羽衣の袖を翻し、左右左の舞の

手を舞うのです。

こうして、様々な東遊を舞い、その名の通り月の様に美しい色をした天

人は、十五夜の空の清らかな光となり、御仏の御誓願の通り国土が豊

かであるように、天上より七宝を降らせた。そして時がたつにつれて、羽